

---

**何だかんだでキミのことが、**

moro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何だかんだでキミのことが、

### 【ノート】

N0001C

### 【作者名】

mororo

### 【あらすじ】

僕は毎日絵を描く。それは風景だったり人物だったりするんだけど、結局のところ、一番描いているのはアイツの姿なんだよ。くりっとした目に小さい鼻と口。もう何も見なくても描けるかも。それくらい好きなんだ。あ、言っとくけど、絵に関しては結構自信があるんだよ？でもさあ、その自信も、当の本人に見られたら逆効果だよねえ。どんな場面でも、僕の絵には必ず君が描かれていて。

目を閉じたまま深呼吸してみれば分かる。君はいつも、僕のノートに。Mr・children『drawing』

短編にして

は長く、中編にしては短い物語です。三万字程度の全六話予定。深く考えず、軽く読んでいただけたら嬉しいです。

## 前篇【壱】 ボクの絵は、（前書き）

評価、感想、指摘など、読者の方々の発言すべてが、作者シゲアキの栄養になります。

何か少しでも思つことがございましたら、お気軽にメッセージを送ってください。

## 前篇【壱】 ボクの絵は、

僕は絵が好きだ。

クリムト、マネ、ドガ、ルノワール。モネにゴッホにパブロ＝ピカソ。

このような世界史で習うほどの有名人が描いたもの、ではない。これらを特別に嫌悪すると言うわけではないが、やはりあまりにも完成されすぎていてどこか面白くない。

そういう、一般人が二、三回人生をやり直しても手の届かないくらい高額な値段がつくような絵画ではなく、僕と同年代の子　つまりは高校生　たちが描く絵が好きなのだ。稚拙な筆使いや色合いだが、時折見せる素朴で純粹なところのある稚拙美が、僕の心をまるでゲームセンターにあるクレイジーゲームのような確率で、ピンポイントに鷲掴みにしてくれる。

こんなことを思う人は少ないかもしれない、というか、僕だけかもしれないが、それでもいい。そのほうがいい。この楽しさを知るのは、僕だけでいいのだ。

趣味というのは人それぞれ。例えそれが周りの人間から奇異の視線で見られたとしても、僕はそれを批判したりしない。

そう、だから。

アイツを描くのは僕だけの楽しみであり、暇つぶしであり、唯一の安如の地なのだ。たとえ周りや当人からとやかく言われようが、やめるつもりなど皆目ない。

今日も僕は、憎たらしくて愛らしい、あの女を描くのだ。

「ここがサインだから

ここで微分すると

コサイン

」

かっかっか、とチョークを黒板に滑らせる音と共に、ウチの学校の数学教師の声が静まり返った教室内に響く。

「ディーエックスが                    ディーワイで                    」

若くて美人、それに加えて教え方が上手いということとで現在学校内で最高評判を受けている教師の、ソプラノの声。

「よってここをユーと置き換えると                    」

朝一番に起きたときに聞こえるウグイスのさえずりのような可愛らしい声で行う数学の授業は、男女を問わず生徒たちの心を掴んでやまない。

まあ、僕には関係ないけどね。

空は快晴。すじ状の巻雲がところどころ水色を覗かせ、壮大に広がりがらどちらともなくゆっくりと進んでいる。まだ四歳くらいの幼稚園児が蒼色だけ使えと言われて出鱈目でたらめに書き殴ったような惚れ惚れとするくらい青々とした空は、夏の名残を未だに拭いきれていない気分で照りつける太陽と協定を結んだらしく、この唸るような暑さに更に拍車をかけている。

いつか見たことのあるような鳥が視界の隅を飛んでいるが、その種類はもう思い出せない。

黒板を打つチョークの音の他には、生徒たちのノートとシャーペンが生み出すカリカリという音しか聞こえないが、その中には、真面目に授業を聞いていたら発するはずのない音も混じっていた。

さっさっさ、というシャーペンの先端をノートの上で大きく滑らせるように移動させる音である。

普通なら気付かないくらい小さな音でも、そのゆったりとした動作から生み出される音は明らかに周りから浮いており、メートルも離れていない隣の席の生徒からさえも横目でちらちらと様子を窺われるくらいである。

さっさっ、かりかり、ごじごじ、すっつ。

たった一人の生徒の空間からは、様々な種類の音響が溢れてくる。途端、多様な音を奏でていたシャープペンシルがぴたと止まり、それと共に今まで発生していたすべての音もスツと止んでしまう。そして、この場に一番似つかわしくないであろう音が控えめに響いた。

「ふあ〜…… あふっ」

欠伸である。全く授業を聞いてない上に、欠伸なんぞを漏らしている学生らしからぬ行動をとっている生徒がここにはいた。なんと僕だった。

……ふうー…… こんなもんかな

軽く深呼吸をしながら、自分がノートの上に描いた絵に再び目を落とす。そこにはよくよく見知った人物の顔面が薄いタッチで描かれていた。

白と黒しか使用されていないはずの絵だが、筆圧の強弱を上手く利用し、濃淡がはつきりと出て、何種類もの色を使ったかに見える。まつ毛の先端まで綿密に表現されたその人物の瞳は常人よりも大きく、くりくりとした印象を受ける。鼻と唇は現実のアイツのように小さく描いた。縦と横しか存在しない二次元の中でできるかぎり立体的に描くように心掛けたので、頬はふっくらとなった。

髪もいつもより上手にできた、かな？

僕は誰に問うでもなく心の中で一人ごちる。

肩よりも少しだけ長く伸びているその髪は一寸の迷いも無い線で表されており、これを描く者の練習量を思い立たせる。実際、いつも一番苦労しているのはこの箇所で、もう何度この曲線を描いたかわからない。絹のようなアイツの髪の毛は一概に表現することができないほど美しいので難しかった。

うーん、どうしようかなあ……

僕が迷っているのは、この絵をどうしようかということだ。

何度も何度も描いている絵なので、いつもなら、何の躊躇もせずにごじごじと消しゴムで跡形も無く消し去ってしまうのだが、今回

は少し事情が違った。

自分で言うのもなんだが、今までで一番の出来のような気がするのである。コレを消すのは勿体無い。そう思い始めたのだ。

このページだけ破って、保管するか？

実は以前にもこのような出来事があり、何枚かそういう良い出来の絵はとっていたのである。今回もその中に加えておくことにしよう。

数学のノートだけど仕方ないよね、などと自分に対する言い訳としかとれないことを心中で思いながら、一枚だけを破こうとノートの端を押さえ、ピンと張る。

せーの、と一思いに切り取るうとすると、

「  
となるからあ、積分すると、……じゃあここを……ユツ  
キー！」

そのタイミングを見計らったように、数学教師が黒板から振り向きざまにビシーっと人差し指を僕の方に向け、名前を呼んだ。

まったく。いくら自分の担当のクラスだからって、勝手に人をあだ名で呼ばないで欲しいね。生徒と教師の隔たりを全く感じさせない、というのがこの教師の人気の一端であるのだが、限度というものがあるだろうに。

しかしそうは言っても相手は年上。年上を敬うのは至極当たり前のことだし、完璧に無視を決め込むわけにもいかないの、絵のこととは後回しにして、とりあえず「はい」と相手に不快感を与えない程度に気だるげに返事をし、椅子を後ろに押し出しながらその場で起立する。

質問はなんだったか、と、絵を一心に描いていたので聞いていなかった先程の授業内容を思い返ししながら、今言うべき言葉を探し出す。

結論。

「わかりません」

ちやんと考えていたら即答できたかもしれないが、質問自体を聞

いていないのだから答えようがない。

「……んーと、どこがわからないのかなー？」

そう言っつて、数学教師は首を傾げる。

しまった、『聞いていませんでした』と答えるべきだったか。この教師の、理解するまで教えるという極限なまでに無駄なお節介具合を失念していた。

「え、と……」

しかし今更そんなことを言うわけにはいかない。この状況をどうやって回避すべきかということに考えをめぐらしていると、呻き声のような不自然な言葉が無意識の内に出てしまう。

「……………」

数学教師はその僕の沈黙をどう解釈したのか、僕以上に困ったような表情を作っつて首をますます傾げる。

おそらく、地味な生徒によくある、あのイエスカノーかもはつきりしないもじもじした態度を僕がとっつていると思っつているのだろう。実際、教室にいる皆にもそう見えているに違いない。

「えーつと、……じ、じゃあユツキーは後で先生のところ質問に来てねー！ わからないところをビシバシ教えちゃうからー！」

この状態のままでは埒が明かれないと思っつたのか、数学教師は困惑から焦燥へ表情を変え、後で教えることを約束する。それから質問を取り止めて僕へ着席を促し、次の質問の相手を、教室全体を見渡しながら模索する。

「じゃあ……えー、次はー」 と無意識のうちに出たと思われそんなことを呟きながら、数学教師は次の相手を探すためにきよるきよると教室の隅々まで見ている。すると突然、ある一点を見るやいなや、キュピーンと瞳が光つたように思えた。その眼光の鋭さと言っつたら、さながら百獣の王のよう。

ああ、またか。

またもや犠牲者が。

若くて美人、加えて教え方が上手というこの学校で最高級位の教

師は、チヨーク投げという、もはや現代日本でそんなことをやったら上の方から何か言われるんじゃないかと言うまで劣化してしまった技術も、最高級に上手かった。

故に、授業中に寝ているやつなんかいたら即座に『石灰チヨークの舞う頃に祭（命名アイツ）』が炸裂すること請け合いだ。

ひゅおおお、とまるで太極拳のような意味深な動作でチヨークを構える。それによって、これから起こることを改めて悟ったのか、周囲の生徒は机の上にあった教科書類をさっと顔の前に持ってきて自分を守る。この数学教師の卓越したチヨーク投げはもはや学校中に広まっており、その技術の精密さを疑うものなど誰一人としていないのだが、やはりその某北斗七星を思わせる構えの迫力から自分を守ろうとせずに入られないのだ。

チツ、と何かが擦れた様な音がした、と普通の人が聞いたらそう思うのだが、ここにいる皆は知っている。コレはチヨークを投げたときに生じる摩擦の音だ、と。

あ、チヨークを投げたな、と皆が認識する前に、実に生々しい蛙を踏み潰したような悲鳴が教室内に大きく響いた。

「あいだあああああああああああああああああああああ  
！」

チヨークを脳天に叩きつけられた生徒が、女という性別を微塵も感じさせないような声を上げる。その耳を劈くつんような音量は、虎の咆哮にも負けじ劣らないほど強大だ。もう毎度毎度の出来事となってしまうっているから当たり前のこととも言えるが、やはり改めてみると、クラスの皆が耳を塞ぐときの素早さは尋常でないと思う。

机に突っ伏して寝ていたその少女は、衝撃でパソコンと強制的に真上を向けさせられていた。もともと静かだった教室に更なる沈黙が襲い掛かる。数学教師はチヨークを投げたままの格好で止まっております、女子生徒もただただ天井を向いているばかりである。

先に動いたのは数学教師で、勝ち誇ったような笑みを浮かべて可愛く言い放つ。

「こらっ！ 言音ちゃん！ 居眠りはダメだぞ」

セリフの語尾を高くし、更にはパチッとウインク付だ。何年も前のかわい子ぶりっ子のような仕草がこの人物にはとても似合っているのだが、今の光景をまざまざと見せつけた後にその態度は無いと思う。一部の男子生徒には、それだけでチヨークのことさえも忘れられる、という猛者もいたのだが、そいつらは頭の構造がどうにかなっているだけだと思う。

というのも、その痛みが半端ではないからだ。実際に、チヨークを当てられた少女は、その言葉ですぐに我に返ったあと、半泣きになりながらも当然のごとく抗議をし始めた。

「何するんですかああああああ！ 脳みそが飛び出たかと思いましたがおおおお！ そんなことになったら教室全体がモザイクだらけになっちゃいますよおおおお！？」

実に大きな声である。彼女は今が授業中だということをわかってるのだろうか。

「わかりませんでしたかー？ 私はチヨークを投げつけたのですよー」

少女の高テンションにもかかわらず、数学教師は自分ののほほんとしたマイペース加減は存続させるらしい。

「そのくらいわかってます！ ！ ていうか投げつけたなんてレベルじゃないでしょう！？ 投射じゃなくて発砲です！ もはやあなたのチヨーク投げはショットガンに匹敵しますよう！」

「あらあら、ありがとうございますー」

「褒めてません！ もう、毎回毎回先生はっ！ 投げる前に一声かけるか揺すって起こしてくれるくらいの優しさは無いのですか！？」

「ないですよー」

「そっでしよう？ それなら次からは ってないの！？ あなたに優しさは欠片も存在しないの！？」

「はいー、一ミクロンも存在しませんー」

「黒！ 意外と腹黒いですね先生！」

「はいー、私は昔ゴスロリファッション界の女王と呼ばれていましたー」

「わけわかんねえ！！」

チヨークを当てられたことに文句を言いながら律儀にツッコミを入れるこの少女は、なんだかんだでノリノリである。数学教師の、ボケとも天然ともわからない発言にわざわざ大げさに反応していた。言音ちゃんと呼ばれ、脳天に白いチヨークという名の弾丸を被弾した少女は、実は僕の右斜め前に座っていた。大きな瞳と、一本一本が細いために流動性の高い髪の毛は、自分が描いた人物に限りなく酷似している。

そりゃそうだ。僕はコイツを描いたんだから。

「それはさておき、言音ちゃん。この問題、わかるかなー？」

急に授業モードに入った数学教師が、言音に質問を投げかける。先程僕が答えられなかった問題と同じところだ。それに対して言音はわからなかったのか「うっ」と短く唸り声を上げ、黙ってしまった。寝ていて聞いていないのでわからないのは当たり前のことだが、コイツのことだ、もしもこの授業中誰よりも真面目に聞いていたとしても理解できていなかっただろう。

「言音ちゃん？ どうしたのかナー？」

数学教師もそれを知っているのか、その綺麗な顔には到底似合わない不敵な笑みを浮かべ、更に問い詰める。それに反応しながら「うっうっ」と唸ることね。ここからは言音の表情は何えないが、さぞかし悔しそうな顔をしていたことだろう。

そしてもう諦めることにしたのか、はあ、と長々しい溜息を吐いてから答える。

「……うー、わかりません」

数学教師はその発言を待ってましたと言わんばかりの表情を顔一杯に浮かべ、

「うん、自分でわからないと言えることはいい事だねー。じゃあ音ちゃんも放課後、ユツキーと一緒に職員室に質問に来てね！」  
などとのたまった。

前篇【壱】 ポクの絵は、（後書き）

新連載したからって、怒らないでね……？  
す、すぐ終わるからぁーっ！（泣）

前篇【弐】 君はいつも、（前書き）

感想、評価、お待ちしております！

## 前篇【貳】 君はいつも、

そこで実にタイミングよく、キーンコーンコーンという通常と何ら代り映えのない授業終了のチャイムが鳴る。「じゃあ今日はココまでですー」という数学教師の、もう聞きなれたやけに間延びした声を聞いてから、ウチのクラスの学級委員長が起立を促す。礼が終わりに着席をした途端に、騒がしくなる教室。わいわいがやがやと、各々が自分たちの休憩時間を満喫する中、一人だけ負のオーラを周囲に撒き散らしている者がいた。

言音である。

半径一メートル以内に入った人間をすべて不幸にさせてしまうようなその人物は、椅子に座ったまま首を傾げて、何も無いある一点のみを見つめてぼうっとしていた。口をだらしなく開いて身体全体の力を抜いているその格好は、とても高校一年といううら若き思春期の乙女には見えない。

質問に答えられなかったことを悔やんでいるのか、それとも未だに数学教師のチョーク投げの痛みの余韻が残っているのか。間違はなく後者だなど思ったのは、ただ単に消去法を実行しただけ。アイツが勉強関連で悔やむことなんて事があつたら、僕は、それこそショットガンで打たれたときのような衝撃を受けるに違いない。

今日は来ないのか、などと思つてそいつを一、二分眺めていると、急に我に返つたようにビクツと身体を跳ね上げ、周りをきよきよと見だした。左斜め後ろで僕が言音を見ていることに気がつくのと、恥ずかしそうにわたたと両手を振る。それから何かを誤魔化すかのようにコホンとわざとらしい咳払いをし、自分の椅子をガガガと嫌な音を立てながら引きずつてこつちにもつてきて、僕と対面するような位置にきた。

慌てて僕は、授業で出番が終始皆無だった数学のノートと教科書をしまう。

授業が終わるといつも机を挟んで僕の真向かいに座るこの行動も、気付けばもう何ヶ月も続いている。入学して数日が立って以来、この残暑が厳しくなる季節まで、よくそんなに続けられるものだと思う。こいつは何を考えているのだろうか。コイツはこの行動をどう思っている？ ただの暇つぶしか？ それとも俺に気があるのか？ わけがわからない。僕としては万々歳なわけだけど、もちろんそんなことはおくびにも出さない。そんなことをしたら僕の気持ちにコイツに伝わってしまう。

や、鈍感すぎる言音には全く伝わらないかもしれないけど。こういうのは気持ちの問題だよな。

「ううー、ユッキー……また先生に怒られちゃったよう……」

先程の激しいボケとツツコミのキャッチボールをした当人とは思えないほど萎れた雰囲気、言音は呟くように僕に言う。

「君がいつもグースカ寝てばかりいるからだろう？」

なるべく挑発的になるよう、僕は呆れた風に言う。

「ち、ち違うよ！ 私はただ……ただ……！ 世界中の恵まれない子どもたちのために目を瞑って一生懸命祈りを捧げていただけだよ！」

「授業中に？」

「う、うん……」

「へえ。でもそれにしちゃあ、ずいぶんとゆらゆら揺れていたね？」

「あ、あれは……世界中の人に、……そう！ 世界中の人に願いを届けるには色々な方向に祈りを飛ばさなきゃいけなかったんだよ！」

この子は世界のために変な電波を発しているらしかった。なんて滅茶苦茶な言い訳だろう。

「な、何かな！？ その疑いの眼差しは！？」

「いやいや、疑うだなんてそんな。僕は君を信じているよ。君が嘘を吐くなんて考えられないからね。君が嘘を吐くなんて、そんな最低最悪の行為をするはずがないもんね。あ、そうそう。僕、嘘そのものは嫌いじゃないけど、嘘を吐く人は大嫌いなんだ。大っっ嫌い

なんだ。大つつつ嫌いなんだ。あ、ごめんごめん。君には関係ない話だったよね」

「ふえ！？ あ、うつつ……」

「どうしたの？ 君には植物プランクトンの全長ほども関係の無い話だけど、何でそんなに泣きそうなの？」

「あ、あああのう……」

「何？ どうしたの？」

「実は、……ミジンコの全長くらいなら、関係ある、かも……」

同じ微生物類で切り返してくる辺りコイツやるなと思いつつも、祈りというのは嘘でしたというなんとも情けない非常に遠回しな発言に、僕は呆れたような表情を強くせずにはいられない。

すると途端に、言音がしゅんとした表情になり、

「ごめんなさい」

『俯きからの上目遣いアノード蚊の鳴くような頼りない声』攻撃を仕掛けてきた。

きゅうしゅにあたった。こうかはばつぐんだ。なーんて、小学校の頃よくやった愛玩動物同士の戦わせるといふ文字だけ見ると何とも残虐なゲームの中にあつたモノローグの一部が、余裕がありそうで本当はない僕の頭の中に浮かんでは消える。

言音の余り余った可愛さにこの場でゴロゴロとのた打ち回って悶絶し、相手の反応を伺うのも実に楽しそうなことイベントだと思つうが、そんなことをして言音に嫌われでもしたら、僕の薄膜で出来たガラスのハートが割れて砕けて粉碎し小麦粉のように粉末になってしまう。それだけは何とか避けたいので、甘いとは思いつつも、いつもなんだかんだでコイツを許してしまう。

言音は、何も言わず黙り込んでいる僕を怒っていると思つたのか、びくびくしながら僕の機嫌を伺っている。右斜めから、左斜めから、更には机に乗り出して真下から、と物理的に様々な方向から僕を見ている様子は、無邪気で無垢で犯罪的に可愛い。衝動的に四年くら

いの刑を与え牢に入れてやりたくなる。もちろん、僕の部屋という名の牢屋だが。

「よし。正直なことはいい事だね」

先生も似たようなこと言ってたし。

そう言つて、机を支えにして顔と顔が拳三つ分くらいまで迫つていた言音の額をやんわりと押し離しながら、そのまま軽くタツチするよつに頭を撫でる。言音と距離を置く際に触れた額は、この残暑で少しだけかいた汗で体温が奪われていて、ひんやりとしていた。産毛のように細く柔らかい髪に触れる。

これが描くときに苦労するんだ。サラサラしているくせに纏まっ  
ていて、先端だけが少しくせつ毛で跳ねているところが、それをよ  
りいっそう思わせる。

頭を撫でている手をそのまま横に滑らせ、手櫛の形にしてひと梳す  
き。今まで一度も絡まったことはない。

手で触った感触は布、しかし一旦手を水平に滑らせると洗い立て  
の肌のような感触を覚えるこの髪は、何か中毒症の元になる毒素を  
出しているのかと錯覚するほどに、ときどき無性に触りたくなる。

「う、ん……っ」

手を頭の上に戻し、撫で続けると、言音は僕の言葉の返事も、  
ただ無意識の内に漏れた音とも付かない声を発した。

この頭を撫でるといふ行為を、いっそのこと言音が嫌がつくれ  
たら楽なのだろうが、こんな風に気持ちよさそうに目を細めて、そ  
れも離れるどころかむしる頭を擦り付けてくるような態度をとられ  
たら、やめられる筈がない。しかしこのように言つたからといって、  
嫌がられたら嫌がられたで先程言つたような僕のガラス細工が壊れ  
るのでやめて欲しいが。

しばらく、撫でる、梳く、撫でる、の行動を反復していると、言  
音はやはり思い出したように先程の弁解を始める。

「で、でもでも！ 真剣には寝てないんだよ！ 寝てたけど、えっ  
と、何て言うか、私の脳は寝てなくて、常に活動してる状態で、実

はちゃんと聞いていたって言うか」

途切れ途切れに今考えた言葉を並べているだけで非常に苦しい感じだとは思うが、一度は負けを認めているので、今度はちゃんと聞いてあげようと思う。

こんな甘い考えを持ってしまふ辺り、やっぱり僕はこの子にどうしようもなく恋をしているんだなあと改めて感じる。ただ言音に触れるというだけの行為だが、それだけで僕の心は天にも昇る気持ちを覚える。

「それでねー、私のお母さんったら」

僕が手を動かしながら恍惚の表情をしていることには気付かず、いつの間にか言音の話題は、先程の弁解から自分の母親のドジっぷりのお披露目にまで発展していた。こいつの話はいつも右往左往して変化するものばかりなので、軽く相づちを打つくらいがちょうどいい。いちいち反応していたらキリがないのだ。

突いただけで爆発しそうなほど泣きそうだった表情はどこへやら、今は完全にその片鱗すらも見せず、とても楽しそうに一人話を続けていた。

それに加えて大げさに身振り手振りをしながら話すもんだから、時々突き出している僕の手に当たって少し痛い。

あまり撫ですぎるのも迷惑だしこの場合話すのに邪魔かなと思いつ、手をおもむろに引っ込める。

「あ、……」

せつかく僕が話の邪魔をしないようにゆっくりと手を戻したのに、何故か急に話し声が止み、代わりに言音の名残惜しげな声が聞こえる。

「どうしたの？」

「え？ あ、いや……」

僕が理由を聞こうとしてもなんだか齒切れが悪い。コイツのこんな態度は珍しいな。いつもなら聞いてもないことをおのずからペラペラと話すのに。

いつもと少しだけ違う言音の態度に違和感を持っていると、コイツには似合わない、意を決したような表情を作って、

「あ、あの、ユツキー！ もっと」

「お話の途中悪いが帰るぞ、ユツキー」

僕に何かを言おうとしていた言音の言葉を遮りながらズイっと間に割り込んで帰ろうと言いだしたのは、無表情な、見方によっては不機嫌そうな表情をした少年だった。

その容姿はあまりに目立ち、この彼がこのクラスに入ってきてからというもの、周囲の人間のざわつきが止まらないでいた。

灰色の髪。

これだけで十分と人目を惹きつけてしまうのに、十人が十人とも振り返ってしまふような整った顔立ちをしているから、歩いていて目立つことこの上ない。常に無表情を装っている顔を柔和にしたらモテモテだろうに、彼はそれに気付かない。

隣のクラスの彼と一緒に帰るようになってから、かなり日数がたっている。言音よりも長いということは無いが、入学して一月後からのことなのでほとんど同じようなものだった。

「あれ、今日は用事でもあるの？ 少し急いでいるように見えるけど」

一緒の方向に帰宅するその彼が自分から早く帰ろうと言い出すのは、極稀なことだった。普段は僕のほうから彼のクラスに行くので、彼は友達と騒ぎながら僕を待っているのだ。

「うむ。少々野暮用が、な」

言いたい事はどんな障害があってもすっぱりと言ってしまふのではないかと思ってしまうくらいはつきりとした性格の彼が、こう言い淀むのもまた珍しい。しかし僕にはわかる。こういうときは決まっ

「また妹さんかい？」

「うっ……」

妹さん関係のときなのだ。彼は妹に駄々甘で、要はシスコンだ。これは僕の憶測でしかないし、彼はこのことをものすごい勢いで否定しているが、傍<sup>はた</sup>から見たらそうとしか見えない。

「実は、昨日ケンカをしてしまった。帰りにケーキでも買って機嫌を取ろうかと……」

この兄妹は毎日飽きもせず漫才のようなやり取りをする極めて良好と言える仲だが、ときどきこのようにケンカをしてしまうときがある。昨日がそのときだったらしい。

「やっぱり妹に貧乳貧乳と連呼したのが拙<sup>ます</sup>かったのだらうか……」

彼のすっぱりと言ってしまう性格は、長所でもあり短所でもある。今回は、それが短所の方向に作用してしまったらしい。

「確かに妹さんは貧乳だけど、それはまだ中学一年生だからしょうがないんじゃない？」

「いやいや、ユツキー、最近の中学生を甘く見るな」

「え、もしかして」

「そうだ。恐ろしいことに、奈々の友達のバストサイズは

「白昼堂々何て話をしてるのかな!？」

彼がとても良いことを言おうとしていたのに、残念ながら、若干不機嫌そうな、しかしやっぱりツッコミの性分は捨てきれないような言音によって会話が途切れてしまった。とても続きが気になるので後で帰り道にでも聞こう。

と、ここで言音との会話も途中だったことに気が付く。思い出しただけでは時間は戻らないし言音の機嫌も戻らないので正直に謝り、さっきの続きを聞こうとする。

「ごめんごめん、で、何を言おうとしてたの？」

さっきの自分の言ったことや言音を見習い、正直に謝ったにもかかわらず、言音は急に慌てて顔を赤面させるばかりで、何も答えようとしなかった。「あの、えーっと……う」などと言いながらはつきりしない。

横でそわそわしている彼を待たせるわけにも行かないし、何も言わないのならそろそろお別れを言って帰ろうかと思っていたが、「あ」と呟いた言音によってその意見は変えられた。

「そ、そう！ 授業中のノート貸してよ！ 今日寝てて じゃなかった、黙想をしてて黒板写してなかったんだ！ お願い！」

「な、何の？」

「数学っ！」

ペチーンと両手を合わせてこのとーりと言いながら、言音は僕に拝むように懇願した。少し不自然な感じがしたが、そんなことは気にならない。

だから、そんな、潤んだ目を、されたら、……。

僕はまたもやある種の破壊攻撃を受けて悶絶しそうになるが、何とか堪えて、若干判断力を鈍らせながらも数学のノートを取り出して言音に渡す。

「終わったか？ 早く行こう」

そこで彼が待ちきれないとばかりに僕をせかす。別段断る理由もなかったなので、机の左側に掛かっている薄っぺらいカバンを取って席を立つ。

何か言音が言いかけた気がするが、早くケーキ屋に行つて帰りたい彼がもうすでに教室から見える廊下にいたし、二度も言音の攻撃を受けて平然としていられるほど僕の世界構造は出来上がっていなかったなので、足早に教室を出た。

もちろん、

「じゃ、また明日」

今日もいつもの言葉を言音に言ってから。

中篇【壱】 灰色の君と、（前書き）

評価、感想、作者の糧をよろしくお願いします。

## 中篇【壱】 灰色の君と、

びびびびび、びっ。

なんとも単調すぎる目覚まし時計の電子音を、たった六回鳴らしただけで止めることができた僕はなかなか目覚めが良いほうだと思う。この間『私は目覚ましを止めたことすら気が付かないよっ』と豪語していたお惚け少女とは大違いだ。

暑さで汗をかかないようにと思っただけ手足を伸ばして起き上がる。ばつと剥ぎ取り、うーんと一度だけ手足を伸ばして起き上がる。

シャーッと窓に備え付けてあるカーテンを開け、ついでに窓も開く。何とも晴れ晴れとした太陽が僕を照り付けるのを感じる。しかもまだ七時と早い時間のためか、暑さを感じさせないほどのひんやりとした気持ちいい風が僕の部屋の中に入り込む。

その風で、昨晩から置きっ放しにしてしまっていた、何か所狭しと書かれた机の上のノートがパラパラと捲られる。

「あー……しまわなきゃ」

目覚めは良いと言ってもすぐに思考能力が回復するわけではない。ぼうつとした頭でそう呟く。

ノートを手に取りすぐさま閉めようと思うが、何とはなしに中身を見してみる。

絵。絵。絵。このノートに描かれている三分の二はすべて自分の描いた絵で埋め尽くされていた。山、海岸、町並み、空。思いつく限りの風景画がそこにはあった。

横を見ると、このノートに描かれているものと同じ場所が写っている写真が大量に散らばっている。自分の絵の原画だ。

昨日は眠たかったからなあ、……出来が悪いや。

昨日の日付になっているところのノートを見て、苦笑しながら感想を漏らす。

しかしそこで、いつもと何かが違うことに気が付いた。昨晚確か

に自分が描いた絵なのにどこか違和感がある。

それは何か、じつと見つめるまでもなく、深く考えるまでもなくわかった。

また、端っこに言音の絵が……。

これはもう癖と言ってしまったほうが正しいのではないかとさえ思う。僕はあまりも大量に言音の絵を描いてしまったばかりに、暇なときや集中しないでぼうつとしているときやわからない問題があるときなど、自分の意中の人物を無意識の内に描いてしまうらしい。この間、自分が自動的に絵を描いているときに意識を取り戻し、これまでにないくらい驚愕した覚えがある。……病気かな、僕。

そんな自分にちよつと失意やら失望やらのマイナスの感情が込み上げてきたとき、何故か急に言音に会いたくなってきた。無性に、あの若干ツツコミ体質のあるチヨーク被弾少女に会いたくなってきた。

「学校が、楽しみだっ」

もちろん目的は、あの髪艶美人だ。

「よう、ユツキー」

僕がそそくさと家を出てから数分たって、そんな声が背後から聞こえてきた。

声にしたがって振り向くと、身長にかなり差のある男女の二人組がいた。高いほうである一人は昨日、一緒にケーキ屋に寄ってから帰った友人だ。今声を掛けたのも彼。片手をポケットに手を突っ込んだままもう片方の手を挙げ、こっちに向かって小走りで見寄ってくる。

「やあ」

それに僕も応え、片手を軽く挙げる。

「あ、ユツキーさん！」

もう一人は、突然彼が小走りになったことに少し驚きながらもトテトテと僕の友人の後ろについてきていて、僕に元気な声を掛けた。彼女は、僕と彼と一緒に買ったケーキを献上されてパクパクと貪ったと思われる、彼の妹だ。その効果もあったのか、二人には昨日彼が言っていたような険悪な雰囲気はない。女の子は甘いもので機嫌が直るとは聞いたことがあったが、そんなものは男が作り出した妄言に過ぎないものとはばかり思っていた。是非メモしておこう。言音のときに使え　ゲフンゲフン。

「俺たちと会うなんて珍しいな。今日は早いんじゃないか？」

いつも始業ギリギリに学校に着く僕とは違い、この二人は割と早く家を出るらしい。前に一度だけ登校中に出会ったことがあったが、いつも面倒くさがり屋な彼がこんな早くから起きていたなんて、と少し失礼な驚き方をしたのを覚えている。

なんでも、毎朝妹にせかされているらしい。つくづく甘いなあと思ふ。

「今日はなんとなくそんな気分だね。早く家を出てみたんだよ」

言音に早く会いたかったからです、なんて馬鹿正直に言うやつがいたら、そいつは恥という言葉を知らないのだろうね。

「相変わらず気分屋だな、お前は」

「君には負けるよ」

「何を言う。俺ほど計画性の高い男はいないだろうよ」

「ケーキで機嫌を取るの、その計画の一部かい？」

「む……」

それには流石に言葉が出ないのか、ちょっと悔しそうに顔を歪める。それを見ていた妹さんはケラケラと笑っていた。

「笑うな貴様」

そんな妹に強めな態度をとる兄。貴様、なんて二人称は普通に生活していてそうそう聞けるものじゃないと思っていたが、彼にはこれが普通らしい。ちょっとでも怒りを感じたり照れ隠しをしたりするときなんかによく使っている。



もう遅いよ、妹さん……。僕はアーメンと別にキリシタンでもないのに十字架を切りたくなかった。

「い、今のは違う！ ご、ごめんなさ」

ぐるん、と獲物を見つけた獣のような素早さで妹のほうを向く兄。「ひいっ!!」

二人の少しだけ前方を歩いている僕からはわからないが、妹さんの化け物を見たような反応からすると、彼はものすごい形相をしていたに違いない。

「それを言われたら、黙ってられないなア、妹よ……」

じりじり、と妹に近づく。それ呼応して妹も一定の距離をとろうと同じ速度で遠ざかる。

「誰が、馬鹿だつて？」

両手を掲げ、手の形がワキワキと別の生き物のように動いている。

「あ、あ……」

妹さんの表情は、さながらB級のホラー映画のヒロインのよう。目の前の対象に完全に恐怖していた。

するとトス、と背中にコンクリートの感覚が。後ろを振り向いても、やはり行き止まり。

ぺた……ぺた……。

背後に闇のオーラを背負っている兄が、それでも容赦なく接近してくる。逃げられない。

「いや、……いやああああああああああああああああああああああああああああああ……」

絹を引き裂いたような、あらん限りの叫び声こだまが木霊した。

「じゃ、またね……ユツキーさん……」

先程の出来事は、魂の抜け殻のようになってしまった妹さんのためにも黙っておいたほうが良いと思う。

僕たちの高校と彼女の中学へと別れる交差点に出たとき、口から白い煙でも吐いているんじゃないかと思ってしまうくらい生気の無い妹さんは、僕と彼女の兄に別れを告げて、自分の学校への道にふらふらと歩いて行った。

「さつきは見苦しいところを見せてしまって、すまん」

妹をあんなふうにした当の本人は、全く悪びれる風もなくそう言った。心なしか顔が艶々しているように見えるのは決して見間違いないと思う。妹をあんなふうに出来て機嫌がよさそうだ。

「君は実の妹にあんなことが出来るのかい？」

「実の妹、だからこそだ」

呆れる僕に対して、嗤いながらそう言う彼はかなり怪しい。いつか犯罪者になったら面会に行つてあげようと思う。

ククク、と悪役中の悪役中といった感じの雰囲気醸し出していた彼は、ふと、何かを思い出したらしくいつもの無表情に戻った。

しかしそこにはいつもの、見方によっては不機嫌な表情は見受けられない。

非常に珍しいことだが、これは彼が真剣な話をするときの合図だ。自分で気付いているかどうかはわからないけど、僕はそれをこの数ヶ月の付き合いで覚えた。

「どころで」

そう言つて切り出した話題は、少なからず僕の心に衝撃を与えた。

「まだ、まごついているのか」

何のことは考えずともわかった。

彼が知っていて僕がまごついていて、彼が唯一真剣になってくれる話など、これくらいしかない。

「言音のことかい？」

「ああ」

そう答える彼の声はやはり真剣味を帯びている。

彼に相談してから実はまだ日が浅く、一月経つか経たないかといったところだ。それ以来ずっと時あるごとに僕の話聞いてもらっている。その間だけは始終真剣で、平生の彼とは似ても似つかない。こういう切り替えの早いところだけは尊敬に値すると思う。

一月前に相談を持ちかけたとき、何故か、滅多に笑わない彼に大いに笑われたが。曰く、「俺が気付かないとでも思ったか、馬鹿めらしい。」

自分が馬鹿と言われたら怒るくせに自分で言う分にはいい。彼がそんな得手勝手な考えを持っていると知ったのはこの時だ。

「いい加減、正直に言ったらどうだ」

「……………」

僕は、何も言えない。

「好きで好きでたまりません。貴女の奴隷にしてください、と」

「勝手に僕の気持ち捏造しないでよ」

いくら真剣な場面であっても冗談を忘れないのは彼の性分であるう。

「じゃあ、俺の雌豚になれ、か？」

「…………… ははっ、そんなわけないじゃないか」

「なんだその間は」

こんな風に冗談を交えながらも、僕たちはだんだんと話の核心に迫っていった。

「僕だって、このままじゃいけないと思っているよ」

「……………」

僕は言音が好き。これまでにないくらい大好きだ。これはもうはつきりと言える。

……………でも、

「この関係が壊れるのが、怖くてね……………」

授業が終わって、笑って、触れて

何の気兼ねもせず、

言音を見ていられる。

絵を、描いていられる。

「断られたらうって思うと足がすくんで、勇気が……」  
笑っちゃうよね。

そう言っつて友人を見ても、笑う様子など微塵も見せない。相変わらぬの無表情だ。

ま、こんな話をして、反応し辛いよね……。

そう思っつていと、隣の彼はおもむろに口を開いた。

「勇気、か……」

何やら憂いの表情を見せる。考えたこともないが、何か自分でも思っつところがあるのかもしれない。

しかし次の瞬間には元に戻っつていて、急に何か悪巧みを企てている少年のような顔になった。

「お前はあいつが好きで、付き合いたいのか？」

「うん」

答えるまでもない。

そう言っつてやると、

「それじゃあお前の後押しをしてやろっ」

その言葉の意味がわからず、登校中ずつと、その時の彼のニヤニヤした顔を忘れることができずにいた。

中篇【貳】 失態なんて、（前書き）

あー、どうせこんな小説誰も見てないだろー……  
とかなんとか思いながら更新をサボっていた自分を罵り殴りたいで  
す。

ちゃんと見てくださる人もいるのに、自分は阿呆ですわ。

評価、感想、作者の励みになります。

中篇【貳】 失態なんて、

朝いつもより早く胸を高鳴らせながら教室に着いた僕だったが、非常に残念なことに、言音の席はまだ空のままだった。はあはあと少し小走りにやってきたために荒くなった息を整えて、自分の机に座る。右斜め前の空席をぼうつと見ながら思い出す。言音はいつも僕より遅く来るんだっただじゃないか、こんなに早くからいるわけがない。

こんなことに今頃気付く僕はつくづくと思うが、病的に会いたがっていたらしい。

最近は特に酷い……。

気付けば、言音のことばかり考えている。起床時、登校時、授業時、食事時、就寝時。帰宅時もあるようとしたが、そのときばかりは友人との会話に専念していて他の事は考えていないことに気付いた。

僕は機会を待っていた。何か僕の背中をぼんつと軽くでいいから押ししてくれるような何かを。

例えばそれは、高校最大の行事といっても過言ではない皆が心浮き立つ修学旅行でもいいし、三年間お世話になった校舎と仲間たちにお別れをする卒業式でもいい。それらは確実に思春期真っ盛りの学生たちに勇気を与えてくれるイベントだし、実際にその時期に成立したカップルなんてのは山ほど聞く。

されど悲しきかな、僕たちの学校の修学旅行は高校二年のときであって、しかもこんな残暑を感じる季節にはない。高校最後の卒業式なんかもつてのほかだ。

しかし気になるのは、十分ほど前に別のクラスに入って行った友人が残した言葉だ。

『それじゃあお前の後押しをしてやろう』

あのセリフはどういうことだったのか。あの時の彼は突き詰めて

もにやけているばかりで教えてくれなかった。

君が背中を押してくれるのかい……？

思って、それはないだろうという結論に達する。あの面倒くさがりの彼だ。人のために何か行動を起こすところなんか想像もつかない。相談は乗っても、よっぽど人が困っていない限り手助けなどはないのだ。

まあ逆を言えば、本気で困っている人のためなら、周りを顧みず助けてあげるのだが。そこが彼の良いところであり、それと同時に面倒なところでもある。

しかし僕はそこまで切羽詰った感じは見せなかったはずだ。内心では非常に危ない状態になったとは思っけど、少なくとも彼の前ではボロは出していない。僕がどうしようもないくらい窮地に立ってそれでもまだ勇気が出ないときに手を差し伸べる。おそらく、彼はそんな感じだろう。

じゃあ後押しとはどういうことなのか。

……わからない

「あ、ユツキー。おはよう」

ここで突然かけられた声に飛び跳ね上がらなかったのは、日頃あの友人と付き合っていて、幸か不幸か、ポーカーフェイスが発達してしまっただおかげだろう。

僕は何事もなかったかのように声の方向を向き、重い片手を挙げていつもの言葉でそれに応える。

「やあ」

声が震えていなかったかどうか心配だ。しかしそれも杞憂に終わったらしく、言音は気にした様子もなくゆったりとした足取りで自分の席に着く。眠たげに目を擦りながら、いつものように、ガガガと嫌な音を立てながら椅子を引いてきて、僕と対面同士に座る。

「ふあああああ……あう」

欠伸のベストオブザイヤーなんて賞が存在したら堂々の一位を飾るだろうなと僕は思った。非常に気持ちよさそうに、がばあと小さ

な口をとて大きく開いて、簡単に言えば欠伸、小難しく言えば眠たいときに不随意に起こる呼吸動作を行った。

「こら、はしたないよ」

僕がたしなめるも、

「いいじゃんー、ユッキーしかいないんだしー」

そう言っ言音は相手にしない。

それは、どういう意味だろうか。『貴方だけには見せられる姿ですわ』なんて願っても無いことを示唆しているのか、『お前みたいなアホには見られてもなんとも思わねーよ』という見下しの姿勢を表しているのか。って、僕は馬鹿か。考えすぎだ。また無意識の内に思考の奥深くに入り込もうとしていた自分を叱咤する。

ああ、でもさっきのは後者だったら嫌だなあ。あんな態度をとられたら僕は正気でいられるだろうか。……いや、案外いけるかも。いつもはあんな口調で話しているが、ちょっと天然が入っているポケポケ娘っていうのも、なんだかギャップあってそえられる気が

「……ユッキー？」

はっ、とそこでまた自分が変な妄想に取り込まれていたことに気付く。

目の前にはいつもと全く変わらない。決して口調が変わったりしない。怪訝な顔をしたお惚け娘がいた。

「あ、いや、なんでもないよ」

必至でそう取り繕う僕を言音はどう思ったのか、不思議そうな顔を心配そうな顔に変えて言う。

「ユッキー今日はどうしたの？」

「へ？」

「何か変だよ？ 声もちょっと変だし、何かよそよそしい感じがする……」

なんてこったい。声が震えていたのが言音に気付かれていたなんて。

しかもよそよそしい感じがするって、意外と鋭いヤツだ。鈍感なんて言った事を撤回する必要があるそうだ。

「そんなことはないさ。ちょっと今日は早く起きすぎたみたいでね、眠たいんだ」

「あ、私もーっ！ 何か今日は目が冴えちゃって早く来ちゃったんだー！」

自分と同じ境遇が嬉しかったのか、身を乗り出して同意する言音。ち、近い……。

「でも変だよなー、眠たいのに寝られないなんて……いつもの私からは考えられないことだよー」

「そうだねえ。いつもの君は寝てばかりなのにね」

「そ、そんなことないよっ！ ご飯を食べる時だってあるよっ！」

「そっちな」

「他にも、歯磨きしたりお風呂入ったり」

『キンコンカンコン』

このまま言わせたら延々と続くのは目に見えているが、もうちょっと待ってから止めようと思っていると、始業のチャイムとは少し違ったチャイムが教室に鳴り響いた。これは学校から生徒への連絡や、呼び出しの際に使われる合図だ。こんな早くから連絡はないだろうから、呼び出しだと思う。

「何かな？」

「さあ」

言音も自分の行動をつらつらと述べるのを止め、放送に耳を傾ける。

「呼び出しかな？ だとしたら私たちには関係ない話」

『えー、あー、コホン！ 一年生の、ユッキーくんと言音ちゃん！ 今すぐ職員室に来なさい！』

関係大有りだった。

「もおー！ サボっちゃダメじゃないですかーっ！ 昨日教えてあげらって言ったのにー！」

目の前でぷうつと頬を膨らませ、怒った顔をしているのは我らがアイドル、数学教師だ。肩ほどに切りそろえられた柔らかそうな髪が、それにあわせてゆらゆらと揺れている。人差し指だけ突き出した手が僕に向けられているが、小さい手だな、などと場違いなことを考えていた。

この状態の事の起こりなんてことは誰に説明を求めらなくても理解できる。

昨日行くはずだった放課後の質問に行かなかったのだ。一方的に取り付けられた約束事だが、来いと言われたからには行くのが礼儀だろう。悪いのは、それを完全に忘却の彼方に押しやってしまった僕。だからこうやって、数学教師の説教を甘んじて受けている。

「わからないと思ったことはですねー、その日の内にやっておかないとー」

僕の隣には、同じく昨日の呼び出しをボイコットした人物が。コイツのことだから、サボったと言うことではなく、ただ単に僕のように忘れていただけだと思うが、数学教師の説教を目を閉じて舟を漕ぎながら聞いているところからすると、あまり反省はしていないだろう。十秒に一回はかくんつと頭が下がってしまっている。倒れないかどうかハラハラものだ。

「 なのですよ。わかりましたかー？」

完全に聞いていなかったが、確認するようなセリフなので説教も終わりなのだろう。僕は「はい」ときちんと返事をするも、言音は「ひゃい!？」と何故か疑問形になっていた。半目になっていた表情を急いでなおしている。

「よし、じゃあ今日も数学ガンバローっ！」

立つたまま居眠りという世にも珍しい技術を言音が発動させたのは目に見えて明らかだったが、数学教師は全く気付いていないようだった。「おーっ！」などと反応を返してくれる言音に、「ご機嫌な風にも見える。」

まあ、この数学教師の天然具合も学校では有名なことなのでさほど驚かない。

「ほらほら、早く教室に戻らないとホームルーム始まっちゃいますよー？」

僕たちは数学教師に背中を押されながら職員室を出た。

「はい、これ。昨日はアリガトねー」

そう言って言音が僕の数学のノートを返してくれたのは、あと一分で授業が始まるぞという別に気合も何も入れないで机の上でぼつとしているときだった。

ああそうか。昨日から何故か数学のノートだけないと思っていたら言音に貸していたんだった。渡したときは頭の中がごっちゃになつていたので良く覚えていなかったよ。

「どういたしまして」

お礼を言われたらどういたしましてと言う。これぞ日本の心だね、などとよくわからないことを考えていると、ふと、言音の態度でどうでもいいことが気に掛かった。

いつもは朝一で返すのに……。

言音は物の貸し借りにはとてもうるさく、常人よりも敏感だった。借りたものはその用事が終わるとすぐさま返すし、どうしても返すのが遅れるときなど必至に謝ってくる。だから僕は何の心配もなく言音に物を貸すことが出来るのだが、今この数学の時間は六限目。

これが終わったらもう帰ることができると言う時間帯だ。僕としてはこの時間が来るまでに返してくれれば万事オーケーなのだが、言

音にしては珍しい。いつもなら学校に付いた瞬間に返すはずなのに、何故？ 学校に来てから写している様子なんかは見受けられなかったし……。

「はい、じゃあ授業を始めますよー」

いつの間にか数学教師が教室内に入っており、委員長が起立を呼びかけていた。生徒が、お願いしまーすという君たち絶対にお願ひする気持ちないだろと言いたくなるようならけた態度で挨拶をし、着席する。

さて、いつも僕はこれから絵を描く。数学の時間と特別決めているわけではないが、基本的にはこの美人先生の授業のときに行動を起こす。この人の美声が絵を描くときのBGMとしてぴったりなんだよ、なんて本人に言ったら怒られそうだが、事実なんだから仕様ががない。

「教科書の九〇ページを開いてー」

一応形だけは、数学教師の言われたとおりのことをする。教科書を出し、開く。

かっかっか、と数学教師が黒板に何かを書き始める。

僕もノートに写し取る。先程返してもらったノートを取り出す。

そして、何の躊躇ためらいもなく、ソレを開く。

そこには

言音の顔が、描かれたままになってた。

中篇【弐】 失態なんて、（後書き）

テストがー……

後篇【壱】 心臓の音が、（前書き）

お待たせですー。

気長に待っていてくれたお方、評価感想を送ってくださったお方、本当にありがとうございますー。

例のごとく、次はいつになるのかわからんですー。

## 後篇【壱】 心臓の音が、

これほど驚いたのは何時振りだっただろうか。少なくとも、ここ数年でこんな経験はしたことがないと言っただけ言っておく。

なっ　　と心の中でさえ言葉に詰まる。あまりの驚きように心の声が外に漏れているのではないかと思つた。もし外に聞こえていたら、周りの者は近くで爆発が起きたとでも勘違いするだろう。それほどまでに大きく、心の中で叫び声をあげた。

どつどつどつど、と心臓が嫌な高鳴りを発し始める。今朝感じたそれとは天と地、一八〇度ほど違う。隠れて悪行をしていたことが、一番バレたくない人に露見してしまつたかのような感覚。

冷や汗が頬を伝い、顎にまで達し、ついには手元に持っているノートにまでポトッと垂れた。言音の絵が滲む。垂れたのは本当に一滴だったのかさえ疑わしい。本当はもつと、滝のように流れていたのではないか。判断力がもう、それすらわからないほどまでに低下していた。

僕は、馬鹿か……！！

言音の絵を人に見せるなんて。あろうことが、その本人に！　なんてことをなんてことをなんてことを！！

………  
落ち着け、落ち着くんだ僕。冷静になれ。こういうときあの灰色のヤツなら自分を見失つたりはしないはずだ。あいつならどうする？　そうだ、まずは表情に出さないことだ。今は授業中だからといって、何時何処で誰が自分を見ているかわからないのだ。動揺を悟られたくはない。一顰一笑すら出さな。ポーカーフェイス、ぼーかーふえいす。

「この公式はー、テストに出るかもしれないよ  
大丈夫。僕の動揺は周りに知られていない。

悟られない程度に、ちらりと周囲を見渡す。



なんとなく、覆水盆に返らずという慣用句の由来の漢文を、この  
間授業で習ったことを思い出した。

もしここに彼がいたら、なんとという言葉を僕に掛けるだろうか。  
『頑張れ』『やつとだな』『自分に負けるな』。……何故かどれ  
もしつくりと来ない。彼がそんな凡庸な言葉を話すはずがないのだ。  
彼なら『当たって砕けて来い』とか『好きな人を自動書記？ 変  
態だな』とか『また奈々とケンカしたんだ……』なんて、不吉なこ  
ととか、人を落ち込ませることとか、今は全く関係ないことを平気  
で言っつきそうだ。彼は誰にも予想が付かないことを簡単に言っ  
てのけるのだ。

でも、今回ばかりは予想が付くかもしれない。

おそらく彼はこう言うだろう。

『ほら、後押しをしてやったぞ』、と。

「言音、話があるんだ」

僕がそう話を切り出したのは、数学の授業も終わり、教室に残っ  
ている人はもう指で数えられるほど少なくなっているときだった。  
僕が声を掛けるまで言音は終始動かず、何故か机と一体になったよ  
うに固まっていた。変な感じはするが、言音が変なのはもう周知の  
事実だし、そう気にすることではないだろう。

授業中に珍しく数学教師のチヨーク攻撃を受けなかったと思っ  
たら、これまた珍しく休憩時間に僕のところにも来なかった。……や  
はり僕と顔を合わすのが気まずいのだろうか。

「え、な、何かな、ユッキー？」

石化したように机の一点のみを見つめていたので、ちょっとやさ  
つとじゃ反応しないと思ってだったが、さほど大きな声で言ったわけ  
ではない僕の声と言音は途切れながらも答えてくれた。

「話が、あるんだ」

「……うん」

何故か二回言う僕。

それで僕の真剣さを悟ってくれたのか、言音は俯きながらもはつきりとした声で答えた。

そこで一度、沈黙が降りる。

教室の生徒たちはいつの間にか誰一人として居残っておらず、まるで示し合わせたように僕等二人だけになっていた。

僕は言音の目を、言音は僕の右足辺りを、それぞれの視線で穴が開くくらい凝視していた。

「」

何から言おう。

今更ながら、何も考えないで言音に話しかけたことを後悔する。

こういうことは衝動的に行うものではないな、と、今後必要かどうか怪しい知識をまた一つ増やした。

こういう時、あの常に饒舌じょうじやうな彼が心底羨ましくなる。あいにく僕は彼みたいに、大事な会話を口笛を吹きながら乗り越えられるような豊富な語彙ごい力は持ち合わせていないのだ。

だが、日常会話くらいなら得意だ。

「今日は、チヨーク攻撃受けなかったね」

僕はいつもしている会話のときのよな声色を装って言う。

俯いた顔を上げ、キョトンとした表情をしている言音は、僕の言った言葉が予想外だったらしい。ふと、緊張の糸が緩んだような気がする。

「むー、毎日受けてるわけじゃないよう」

ぷつつと頬を膨らませる。思わず指で突きたくなった。

「でも受けない日のほうが珍しいんじゃないかい？ あ、えー…

…『チヨークのなく頃に』？」

「違うよユツキー。『石灰チヨークの舞う頃に祭』だよ」

くすくす、と近所のお姉さんのような微笑を浮かべる。激しく似合わないけど、それが可愛さを強調していることは認めざるをえない。

「どつちでもいっしょだと思っけど？ あと、前から言おうと思っ  
てたけど、それ語呂が悪すぎだよ」

「がーん！ と死刑宣告を聞かされたような表情になる。少々シヨ  
ックを受けたらしい。」

「ひ、酷い！ 私、三日三晩考えたのに！！」

「君の過ごした時間は現在進行形で、人生で無駄な時間のダントツ  
トップを爆走中だろうね」

三日三晩って、比喻じゃなかったら真性のアホだ。

「ちゃんとチヨークの痛みを伝えるために惨劇っぽいタイトルにし  
たんだー」

「？ どこが？」

「ナイシヨー」

わけがわからない。

「まあそれはいいけど、ちゃんと授業聞かなきゃテストのときに困  
るよ？ 居眠りばかりしてたら内申にも響くし」

「い、居眠りなんかしてないよ！ 瞑想だよ！ それにいざとなっ  
たらユツキーに教えてもらおうからいいもんっ！」

「甘えないの」

右手で言音のおでこに軽くチョップをしながらそう言っつてやると、  
「あで」と声を漏らし、半泣きになりながら睨み付けてきた。

「うっ……ユツキーのばか……」

「あれ？ クラスで常に上位をキープしている僕が馬鹿なの？」

「……う」

「そっだ、言音にひとつ知識を与えてあげるよ」  
「……？」

「体長が五ミリしかない綿虫っていう生物にも、考えるための脳は  
あるんだって」

「何が言いたいのかな！？」

「あ、でもオラウータンと人間の違いは一パーセント未満らしい」

「だから何が言いたいの！？」

君が思ってる通りだよ、なんてことをきっぱりと言っわけにもいかず、そこら辺はゴニョゴニョと誤魔化す。言音はまだ何かギャーギャー言っているが、こんなことを気にしていたら言音とは付き合っっていけない。……や、『付き合う』ってそういう意味じゃないけどネ？

と、ここまで思っつて、僕が言音に話しかけた本来の理由を思い出す。普通の会話が楽しくて忘れてしまっていた。

もし失敗したら、こんな会話も出来なくなるのかな……。

最悪の結果を予想してしまい、首を振って思い直す。弱気になっつてどうする。強気だ、強気。

「ユツキー……？」

いきなりブンブンと首を振り出した僕の奇行を変に思っつてか、言音が心配そうな顔をしながら僕の顔を覗き込む。そこには、先程までの緊張の表情と声色は感じられない。むしろ、いつもより柔和になっつた気さえもする。

「ねえ言音」

ん？ と首を傾けながら聞き返す言音。

「今度、僕の友達と言音で、海にでも行こうか」

「あはは、もう九月だよ」

そう言いながらも、首を縦に振る。

「友達っつて、いつもユツキーと一緒に帰っつてる人のこと？」

「うん。あと、彼の妹さんも来るかもしれないな」

「うん、えっと、それはいいんだけど……海で何するの？ まだ暑

いけど、もう海には入れないよ」

「……たまには風景だけを楽しむのもいいんじゃない？」

ああ成る程ねー、などと言いながら、言音は妙に納得した表情を作る。

そして何を思っつたか、急に目を輝かせて僕に詰め寄りながら言っつた。

「じゃあ私写真係！ 風景も友達もユツキーも、皆まとめて撮っつて

あげるよっ!」

小学校時代の言音を知らない僕が、何故か幼い頃の言音を容易に想像することができた。瞳はキラキラと期待に満ちていて、ダメと言っても絶対にそうすることは目に見えていた。

君が写真係なら　そう前置きして僕は言う。

「じゃあ僕は、写生係だね」

きゃっきゃと子どものようにはしゃいでいた言音の動きがピタリと止まった。まるでビデオの一時停止ボタンを押したみたいに表情が一瞬にして引きつる。口元が右半分だけ三日月のようにつり上がって、それがひくつと痙攣した。

ごくり、と唾を飲み込んだ音を出したのは僕だったか、言音だったか。

ギギギ、と油の足りない旧式ロボットのよう言音がこちらに顔を向ける。

「へ、へへへえー、ユツキーって、えええ、絵なんか描けるんだあ……意外かもー……あ、あはは」

言音は苦笑いも十分に出来ていない顔を僕のほうに向けて言った。顔面にも潤滑油は行き渡っていないようで、口元が固まってぎこちないことこの上ない。

この顔を更に固まらせるのは非常に心が痛むが。

この機会を、逃してたまるものか。

「僕の絵、見ただろ？」

単純明快、単刀直入。僕が初めに訊きたかったことをすっぱりと言ってやった。正確にはこの言葉ではないのだが、これを言わないことには始まらない。何も始まらないのだ。

言音は僕の絵を見たのか、それを見てどう思ったのか、上手だっ

たか、怒ってないか。

さまざまな質問が脳内を駆け巡る。

しかしそれは、体中に滲んでいる汗と共に、僕の着ているアンダーシャツに染みこんだ。

次の句を言う気が起きない。言わなきゃいけない、わかっちゃいるけど、目の前にいる少女が激しく狼狽している様を見て、相手の発言を待ってみようと言う気になる。

言音の目が、生まれたてのオタマジャクシ並みに忙しく泳いでいる。何か思い当たる節があるのは明らかだった。

やがて、ゆっくりと口を開いた。

「……うん」

そうただ返事をするだけの行為を、言音はとても躊躇ためらっていたように見えた。

何てことはない、たったの二文字の返答。ただそれだけのことだけれど、自分では理解していたつもりだったけれど、やはり改めて、恥ずかしさが顎下辺りから熱と共に湧き上がってくる。

やっぱり見られてたあああああああああああ！

冷静沈着を装っている会話とは裏腹に、僕の心はもう爆発寸前。俯いている彼女からは、かろうじて僕の真っ赤な顔を見られないのが唯一の救いだ。

もし今この場に友人が来てこの内心を指摘されでもしたら、教室の窓をぶち破って逃げ出してしまうかもしれない。それくらい恥ずかしい。

しかしそれを一ミクロンも表情に出さない僕ってば素敵。

「……どう思った？」

なんでもないことのように僕は尋ねる。『どう思った』なんて、限りなく漠然とした問い方をしたのは、今の言音の心情を何でもいから知りたいからである。テレビ番組のレポーターなどでは最悪な問い方だと思うが、この状況にはとてもあっているとと思う。いま僕が訊きたいことのすべてが含まれているのだ。

しかしそれには答えにくかったのか、しばらくは「うー……」とか「えつと」とか言いながら言いよどんでいたものの、やがてちよつど良い言葉を見つけたらしい。恐る恐るといった態度で、俯き加減のまま言った。

「何か、ものすごく、想いが、詰まっていた、気が、します……」  
何故か、敬語の上になんかゆつくりとした話し方のために最初は何を言っているか分からなかったが、僕が数瞬後に理解したとき、ボンッと顔が朱色に染まった。

さっきの羞恥とは少し違う種類の恥ずかしさ。いつの間にか他人にも分かってしまうまで念を籠めて描いていたのか、と今更ながら思う。

「ユツキーの、この人に対する想いが……すごく……ものすごく、伝わってきた」

正直、言音がここまで感受性豊かな娘だとは思わなかった。普通は、ただの一般高校生が描いた絵なんかか上手下手の判断だけで精一杯なのに、描く者の意図をも感じることが出来る人はそうそういないと思う。

言音に対する僕の中での評価　いろんな意味でダメで言えませんが　を改めなくては、と、こんな肝心なときに場違いな思考に入ろうとすると、ふと、何か違和感を覚えた。モジモジしながら話す言音ではなく、呆けた顔をした僕ではなく、さっきの言音のセリフに。

『この人に対する想い』……？

コイツは自分のことをこの人、なんて客観的かつ無機質な呼称で呼んでいたんだっけ？　そんな独特な一人称だったら、深く印象に残りそうなんだけど。

僕のその当たり前とも言える疑問は、言音の信じられない発言によって、いとも簡単に解決してしまった。

「ユツキーは、この女の人が、好きなんだね……？」

違和感は疑惑に。疑惑は確信に。

言音はどつやら、ノートの人物像は自分ではないと思っているらしい。

笑っていいだろうか。

後篇【き】 心臓の音が、(後書き)

いやっほい赤点だらけいやっほい。

後篇【弐】 勘違いでも、（前書き）

一ヶ月かあ……一ヶ月、一ヶ月……。  
なんかもういろいろスミマセン。

## 後篇【貳】 勘違いでも、

今度は僕が石化する番だった。

さつき言音が固まっていた理由が良く分かる。人間、予想外の事が起こると思考が止まり、動くことが出来ないようだ。

僕だけではない。自分の周りの時間さえもが止まって感じる。

しかし残念ながら時は無情にも流れ続けるもので、教室の外のグラウンドで運動している部活動生の喚声が聞こえているのがそれを裏付けていた。

先程の言葉をゆっくりと反芻する。その言葉は、僕の頭にはおろしたてのタオルのように染み込みにくかった。

暑さと緊張感でとめどなく溢れていた汗が、言音の一言によって急激に引いた。ついでに頭の血も引いたようで、先程よりも少しばかり考える力が付く。

つまりは、言音の勘違い、というわけか……。

怪訝そうな顔で僕を覗き込んでいる言音を見て思う。

いや、僕の早計だな……。

僕は心の中だけで頭を抱えた。言音の鈍感っぷりがここまでとは。僕は少し甘く見ていたのかもしれない。

「えーっと、どうしたのかな、ユッキー？」

「い、いや、何も」

僕の心中をこれ以上ないくらい歪めて理解している目の前の少女は、未だモジモジしながら何かを話したそうにしている。しかし何も言わず僕の顔を伺っているところを見ると、どうやら先程の発言の反応をして欲しいようだ。

『この女の人が好きなのか』

答えはもちろんイエスだ。これは何ヶ月も前から感じている気持ちだし、今更変えるつもりなんてさらさらない。普通なら 言音が鈍感でなかったら そう答えることによって、所謂、告白した

ことになるのだろう。

しかし、ココでの場合はどうだろう。言音はノートの人物を誰か別の女と感じているようなので、今イエスと答えたら、告白どころか友人への恋愛相談みたいになってしまう。そんな変な関係は嫌だ。どう答えるべきか。

少し悩んだが、僕が出す答えは、何が起ころうとも変わらない。

言音に嘘は、吐きたくないのだ。

「うん、好きだよ」

しっかりと言音の目を見て言おう、そう思ったのだが、やはり言音の視線は僕の右足。目線同士が交差することはなかった。表情も良くわからない。ここまで右足首を凝視されたら、何かおかしいものでも僕の右足にあったのかと思ってしまっ。

しかしそれでも、言音の元々大きな瞳が、裂けんばかりに更に大きく見開かれたのは良くわかった。僕が言った瞬間、身体全体をピクッと反応させ、拳を強く握り締めたのも見えた。お前は嘘を吐いていると僕から指摘されたときの反応に良く似ているが、今回はどこか違うように見える。

「そう、なんだ……」

聞こえてきたのは、誰が聞いてもわかる落胆の声。いつもの言音からは考えられないような弱々しさだ。

「そうなんだ」

意味もなく、僕は言音に続けて言う。するとまた、言音の肩が少し揺れた。

表情は、わからない。

ここでしばらく、静寂が訪れる。僕の言葉を最後に、言音も僕も黙り込んでしまった。

遠くからエコーがかかったように、野球部員たちの声が聞こえる。複数の音が混ざり合っていて、しかも音源が遠いのでなんと聞こえているのかはわからない。

この教室一帯が市民プールにでもなったようだ。誰のとも分から

ない声が響いて木霊する。

耳につくような音だが、それ以外には物音すら聞こえないので、無音よりはましだと思われる今の状況にはちょうど良い。

教室の中に夕焼けが差し込んできた。その紅色と机が反射して、教室全体がオレんジに染まる。身体の左側面のみ当たる光が少し熱い。もうそんな時間なのか、とぼんやりと思った。

光と共に、生暖かい風までもが僕の頬をくすぐる。教室の窓を閉めるのは最後に教室を出た生徒、というこの学級の規則を思い出した。

風が僕に吹きかかる。俯いている言音にも、さあつと風が通り過ぎた。

肩よりも少しだけ長く、それでいて先端が少し跳ねている絹のよな髪の毛。それが風に沿って、踊るように靡なびいた。

このとき僕は、心底、ソレを見なければ良かったと思った。

風でそよいだ前髪の向こうの、あらわになった言音の表情を。

涙が、見えた。

大きな瞳に溢れんばかりに溜まった液体が、つつ、と頬を伝っている瞬間だった。

俯き加減が、少しばかり強くなる。そのとき、一滴の雫が言音の頬を離れた。ポタつとフロリングに落ちるまでの時間は、一瞬と言っても差し支えなかった。

水を吸い込まない床がその水を弾く。水面張力で、小さな珠になっっている様子が少し神秘的だ。

「あ、……：れ？ な、なんでだろ？ 目から、変なのが……」  
言音は俯いたままそう言って、涙を手で乱暴に拭う。自覚がないのか、少々慌て気味だ。

その光景を見た僕の心といえば、当惑の一言だった。

何故言音が泣いているのか、少しも理解できない。僕は特別人の

心に敏感というわけではないのだが、今までなら、言音の思っていることは、大体読み取れていたつもりだった。

それが勘違いだったかどうかは定かではないが、とにかく今は、全くもってわからない。

……今の風で、ゴミでも入ったかな？

「だ、大丈夫？」

もしそうなら、急いで洗わないと。そんな見当違いなことを思いながら、僕は言音に気遣いの言葉を掛ける。

「え、う、うん。大丈夫、大丈夫、だいじょ……ひぐっ……ぶ。…

……ひっく、だ、い、じょ……」

ぼろぼろぼろ、そんな擬音が付きそうなくらい涙が流れてくる。

飽和状態だった瞳から、崩壊したダムのように勢い良く溢れ出す。

「ちよ、こ、言音!？」

思わず僕も慌ててしまう。目の前で女の子が泣いていたら、誰だって悲しむか慌てるか、とにかく何らかの感情を持つことは当たり前だろう。

ハンカチを、と思い、ポケットの中を探してみたが、いつも所持していないものを今だけ持っているなんてことは有り得るはずがなく、涙を拭くものなんか何一つとしてなかった。

僕が声を掛けても、言音は「なんでもない」の一点張り。そんな風にしゃっくり混じりに答えられても説得力に欠けるのだが、何だか話しかけづらい雰囲気を漂わせていたので放って置くことにした。しばらく、ぐしゅぐしゅという鼻水をすする音が続いていた。涙は相変わらず止め処もなく出てきてはいるものの、先程よりは落ち着いていたようだ。袖で目元を拭う回数が減ってきている。

ふうー、と言音が浅く深呼吸をして落ち着いた頃には、夕焼けによって作り出された影がかなり移動していた。心なしか、オレンジ色の光にブラックが注がれている。

「ご、ごめんね。急に泣いちゃったりなんかして……」

目を真っ赤に腫らしてはいるが、声はしっかりとしている。どう

やら完全に落ち着いたようだ。

「え、と……………なんで？ 何で急に泣いたりなんか」

「わかんない」

「え？」

「わかんないんだよ……………！」

弱々しかつた声の語尾が若干強くなる。視線を落とすと、言音が握りこぶしをつくっているのが見えた。

「私ね、なにもわからないの」

言音が言った。

「数学もわからないし、理科もわからないし、英語も世界史も地理もわからない」

ちよつとそれは不味いんじゃない？ あ……………なんて茶々を入れるほど、今の僕は馬鹿ではない。黙って続きを待つ。

「……………ついでに、ユツキーの好きな人もわかんない」

少しの空白の後に、言音は続ける。

「ユツキーが絵が上手なことも知らなかったし、ユツキーのお友達の名前も知らない」

言音は話す。

「何で今こんな胸が苦しいのか理解できないし、何で 昨日良く眠れなかったのかも理解できない」

言音は一人で喋り続ける。

「どうして私は泣いたの？ どうして涙を流したの？ どうして、ユツキーは、そんなに、私に優しいの……………？」

ゆつくりと、視線を僕に合わせる。今度は確実に僕の目を捉えて動かない。言音の瞳に、いつものぼえつとした緩みはない。だが、代わりに、触れると消えてしまいそうな揺らぎを備えていた。

「ねえ、何で？ 教えてよ、ユツキー。勉強みたいに教えてよ！ いつもみたいに教えてよおおお！！」

いつの間にか、音量がマックスになっていた。ほとんど叫びに近い形になっている。

言音は再び泣いていた。潤う程度だったが、確実に。

僕は自分自身に問いかけたかった。

今、この瞬間、世界中でいちばん愚かな人間は誰だろうな、と。

コンマ一秒で答えられるだろう。

僕だ、と。

他にも、問いかけたことが 否、詰問したいことが 山ほどある。

何故僕は言音を泣き止まさない？ 何故僕は何も話さない？ 何

故僕は 早く気付いてやれなかった？

良く考えれば、これほどまでにあからさまな主張はなかったと思う。

いつも言音は僕の隣にいた。いろんな話をした。そして、たくさんふざけ合った。

それらは全部、全部全部、言音の心の声だったのだ。

早く気付いけ、早く言ってくれ。そんな言音の声が、今なら時間を越えてでも聞こえてくる。

僕は、大大大馬鹿野郎だっ！！

気付かなかったのは自分のことで頭がいっぱいだったからでした、なんて、言い訳が通用するわけがない。ただ僕が馬鹿だったただけだ。絵を見せてしまったときなんて比較対象にならないくらい大馬鹿だ。最低だ。阿呆だ。

自分を傷つけないようにするために言音を傷つけて。自分が離れたくないから勝手に近づいて。

全てが保身だ。僕はちっとも優しくなんかない。自分のことばかり考えてる。

僕は汚い人間だ。

どうしようもなく狡猾だ。

でも、それでも……

それでもやっぱり……

どうしようもなく、キミのことが

言音が静かになったのが分かった。僕の返事を待っているのか大声を出して疲れたのかのどちらかだろうが、僕にはそんなことはどうでも良かった。

どうせこの娘はすぐに騒ぎ出すことになるだろうから。

深呼吸をして目を閉じる。体中に酸素が行き渡るのを感じる。血液が冷水になったように、僕の体温と頭の中を冷やしてくれる。さつきまで二倍も三倍も早く動いたと思っていた心臓はもう静粛に鼓動している。

僕の心境の変わり様に、自分でも驚いていた。人間、覚悟を決めれば大抵のことは出来てしまうものだなあ。このまま一〇〇メートルを五秒で走れたりしないだろうか。ぼんやりと思う。

「ねえ言音」

僕の口が義務を果たすかのように自然と動く。

もう、止まらない。

「僕は……好きなんだ……」

「……だから、もうそれは聞いたよ。その人のことが好きなのはもうわかっ」

「好きだ、言音。大好きだ」

これがマンガだったら目玉が勢い良く飛び出るんだろうなあ、と僕にのんびりと思わせるくらい言音は目を見開いた。目だけでなく口までもがカポーンと開いていることから、その驚きは尋常でないことが良く分かる。

その、なんていうか、もう、乙女の仕草の欠片も残されていない



身振り手振りで素早くB5のノートを作りながら言った。

「あんなに綺麗で目がおつきくて、なおかつあどけない可愛さの残る女の人はどうするの？」

天然だとしても、少々自分を美化しすぎだと思う。

「仮に。か、仮にだよ！？ 万が一にも億が一にもないことだけど、ユツキーが、私のことを、す、すすすす……す……き、として」  
語尾が聞こえなくなるほど小さくなりながら言う。

「ふ、二股はよくないと思うんだ……」

「はあ、と思わずため息が漏れてしまうのは仕方ないことだろうと思う。この娘は<sup>アホ</sup>どうしても自分と僕の絵を繋げたがらないらしい。完全に別人と思いついでしまっている。

「そんなに似てないかなあ……」

「そこまで頑<sup>かたく</sup>なに否定されると、僕の絵画力はその程度だったのかと自信がなくなってしまう。」

「ただ今今はそんなことは関係ない。」

「どうやって言音に教えようか。ノートの女の人とキミは同一人物なんだよ、と直接言うのは気が引ける。『ええ！？ 全然似てない！』などと言われたら立ち直る自信がない。」

「というか、引かれたらどうしよう。『うわ、ユツキーって変態だったんだ……』なんてゴミを見るような目で見られたら立ち直るところか生きていける自信がない。」

結論。

「言い包めよう。」

「言音、僕がキミを好きなことは、万が一でも億が一でも兆が一でもない。又とはない真実なんだ」

「また言音が赤くなるかな、と少し期待していたが、もうすでにさつきから真っ赤だった。」

「僕はさつき、君を騙してないって言ったけど、実は、ちょっとだけ嘘をついたんだ」

「……ほ、ほらねー！ やっぱり嘘だったん」

「『ノートの人が好き』っていうのは嘘だったんだ」

「え」

「ごめんね、言音の慌てる顔が面白くて」

これは、まあ、嘘ではない。

「あの絵は、ただのマンガのキャラだよ。そうでもないよ、あんなに綺麗で目がおっきくて、なおかつあどけない可愛さの残る女の人なんているわけないだろ？」

言音の顔に、どこかほっとしたような表情がうつる。

「そ、そうだね。あんなに綺麗で目がおっきくて、なおかつあどけない可愛さの残る女の人なんて、本当にいたらモテモテだもん……」  
ここで言音に本当のことを教えたらどんな反応をするだろう。自分で自分を知らないうちにべた褒めしていたなんて知ったら、卒倒するかもしれない。

教えてしまおうか、なんていたずら心が僕の中に生まれてきてしまつのは、sだと自覚している自分にとっては仕方のないことだ。教えないけど。

「さて」

そう前置きして、少し間を取って、僕が今一番訊きたいことを言音に言う。

「返事を、くれるかな？」

言音は僕の目を見ていない。

俯いて僕の右足ばかり見ていたが、視線が脛すね、膝ひざ、太股ふとももと、徐々に上がってきて、顔まで上がってきた。

眼球が定まっていけない。僕の口を見たり髪を見たりと、とにかく目を見ようとしない。

だめか……？

最悪な不安が再び頭の中を掠める。

しかし次に言音が言ったことは少々意外だった。

「もう一度、言ってくれるかな……?」

「え?」

「もう一度だけ、あの、えっと……ユッキーが、私のことを……その……」

「ごによごによと語尾を誤魔化すように小さくするが、言音の言いたい事は十分すぎるほどに伝わった。

思わずにやけてしまうのを堪えながら、

「何度でも言うさ。大好きだよ、言音」

薄暗くなった教室の中に、涼しい風が吹きぬける。

制服のスカートが波を打ち、髪が靡<sup>なび</sup>く。

露<sup>あつわ</sup>になった顔は、とんでもなく輝かしい 笑顔だった。

「返事は?」

再度言音に問う。

「私はもちろん」

「

夏はもうすぐ、終わりを告げようとしていた。

## 後篇【貳】 勘違いでも、（後書き）

これで一応、全六話終了です。  
最終話です。

.....  
その予定だったんですが、

「アレ？ 何このオチ。シゲアキ貴様ちゃんと最後まで書けゴラア  
！！！」って人が大半でしょう。自分で読んでいてナニコレ？って  
思います。

ですから、後日談として続きを書きたいと思います。

だけど忘れないください。この後篇【貳】が一応最終話です。こ  
れで終わりなのです。

だから、何が言いたいのかと言いますと.....、  
例によっていつになるか分からないぜ！ っってことです。

これからの夏休み、時間が割けるかと思いきや、

50%は勉強です。40%は体育祭の準備です。8%は小説読みで  
す。2%は家事です。

この忙しい中、執筆はおそらく無理でしょう。  
すみません。

なんか愚痴っぽくなってしまいました。日常生活の忙しさをココに  
持ち込んでくるのは最低だと思っていたのですが、言わずにいられ  
ませんでした。

最後に、評価感想を送ってくださった読者の皆様、誠にありがとう  
ございました。

ここ一月くらいまったくこのサイトに来ていなかったので評価の返  
事が出来ませんで、申し訳ありませんでした。

この場を使って御礼とさせていただきます。

エピソード ある日の君。(前書き)

今回は視点が違います。

## エピソード ある日の君。

季節は冬。

マフラーと手袋が一日中手放せなくなるほどギンギンに冷え切った空気の中で、俺は妹と二人、近くのスーパーに今晚の食材を買い求めに来ていた。

結婚してから優とっさんに十六年は経っているというのに、今だラブラブな優男かあさんと最強武術家は、今日は二人ともデートらしい。だから自分たちで食料を確保しなければならなかった。

かわいい子供たち二人を残してナニしてんだか、と呆れずにはいられないが、普段頑張っている(らしい)二人なので、今日くらい多めに見てやることにした。

ちなみに料理を作るのは妹の奈々。コイツはなにも怪力ばかりを特技としているわけではなく、料理も得意としていた。しかも俺の好みを知り尽くしているので、ある意味、母さんに次ぐ最高の料理手である。

「おにいおにい、今日のご飯は何がいい？」

店の中の精肉コーナーをきよろきよろしながら歩いていく奈々が、振り返らずに聞いてきた。

「んー……」

奈々の一歩半後ろを歩きながら考える。

ここは俺と妹、両者の好物であるハンバーグにするか、それとも奈々の手間を考慮に入れると、あまり時間の掛からないカレーにするか。

試行錯誤の上、カレーを所望しようとしたが、

「……………」

奈々は牛肉のミンチをすでに手に取っていた。

こちらに首を傾けながらニヒヒと笑い、『ハンバーグっ、はっん

ばーぐーっ』とか言いながら買い物カゴに入れてしまった。

「……流石は我が妹、よくわかつているな」

「えへへ、伊達に十三年もおにいの妹<sup>だて</sup>をやってないよっ」  
にへらと笑い、顔を崩す。

ああ可愛い。こいつの可愛さは犯罪じゃないだろうかちくしょう。料理も上手いし気も利くし、これは絶対犯罪だな。いや、どちらか言つと、こんな思考を持っている俺のほうが犯罪的か。

……どうでもいい。

「ねえねえおにい」

「ん？」

「このご飯食べたなら、ユツキーさんの家に行くの？」

「は？ 何でだ？ 別に行く予定はないが」

「いや、だって……冬休みの宿題、終わってないでしょ？」

「ぐはあ！」

わ、忘れてた！ 明日から学校なのに！ 宿題なんて存在から忘れてたあー！！

「ほらあ、やってないならユツキーさんここで見せてもらわなきゃ」

「そ、そうだな……アイツに頼み事するのは気が向かないんだが、この際仕方がない……」

あのドS野郎に頼み事したら何を代償に取られるかわかったもんじゃないが、それも言つてられない状況だ。

後であいつの家に行って宿題を写させてもらおう。

と、その時。

「ねえ言音、夕食はなにが食べたい？」

「えーつとね、ハンバーグ！ ……じゃなくて、やっぱりユツキーが好きな物でいいよっ」

「僕が好きな物？」

「うん！」

「じゃあ……今夜は言音を食べようかな」

「も、もう！ ユツキーのばっかっ！」  
「あはは、叩くなよ。冗談さ。今日はハンバーグにしようね」  
「やったー！ ユツキー大好きーっ」

気持ちの悪いバカップルが目の前を通り過ぎようとしていた。

「ね、ねえおにい……………」

「……………なんだ妹。今の俺は非常に機嫌が悪いぞ」

「今の二人って……………」

「ああ、ユツキーとその相棒だな」

「……………あんなにオープンな人たちだったっけ？」

「違うな。あんな風になったのはこの前からだ。あいつらが付き合い前やその直後は、それはもう思春期真っ盛りで、中学生の男女のような初々しさがあったのに、今はこの有様だ。人目を気にしないバカップルになってしまった」

ユツキーとその相方が付き合い始めたのは、もう夏も終わりにかけていたある日のことだった。なんでも、ユツキーが描いていた言音の絵を本人に見られて、恥ずかしさのあまり勢いで告白したらしい。すべてが終わった後に「君のおかげさ」とかなんとか言っていた気がするが、俺にとっては嫌味にしか聞こえない。

俺は別に何もしていない。ただ、『何もしていない』ことが必然的にそういう場面を作り出すことは予想できたがな。それを黙っていただけだ。

俺のおかげなんかじゃない。すべては二人が両想いだっただけからその結果だ。

「あれ、妹さんじゃない？ あ、あとその兄」

「あ、こんにちはー、ユツキーのお友達の妹さん。あ、あとその兄」  
俺としては全力で二人をシカトして、ここで見たことなど記憶の彼方に投げ捨ててしまいたかったが、残念ながら話しかけられてしまった。

というか、俺の存在がオマケみたいになってしまっているのは気の所為か？

「なんだかとも嫌そうな顔をしているねえ」

「そんなことはないぞ、ユッキー？ 俺は普段は会わないこの時間帯にお前に会えてとっても嬉しい」

「……おにい、顔が歪んでる」

おっといけない。思わず本音が顔に出てしまっていた。

「おっといけない。思わず本音が顔に出てしまっていた」

「……おにい、口にも出しちゃってる」

「相変わらずだねえ、君は。冬休みで少しは変わっているかと期待してたんだけど、そんな様子は微塵もないね」

俺の表情を見ながら、ユッキーは呆れたように言う。

やかましいわ。

「それで？ 何で君はこんなところにいるの？ 『俺の母の料理は世界一だー』なんて豪語していた君には来る必要の無いところだと思っけど」

俺のセリフのところを、口真似しながら言う。全然似てない。

「今日はその料理家かあさんがいらないんだよ」

「へえ、言音のこと一緒だ。何か用事でも？」

「んー……、用事と言えば用事か。父さんと一緒にデートらしい」

「いいねえ、君のところの両親は。いつまで経ってもラブラブで」

「仲が良すぎるのも考えものだ。今頃二人は豪華ディナー。そしてその後ベッドに直行。二人合わせてギシギシアンアン。十七離れた兄弟ができるのは勘弁して欲しいところだな ってくばはあ！！」

「もう、おにい……えっちな言い方しないの！」

両親の子作り過程を想像しながらペラペラと話していた俺の顔に、奈々のツッコミにも似た裏拳が炸裂。本人にとっては軽く叩いたつもりかもしれないが、武術家直伝ははの怪力で俺のフェイスは沈没寸前。ちよっいたい。

「そ、そうなんだ。あ、あはは」

奈々の奇行に流石のユツキーも若干引き気味。ほんの少し脚が震えているのは見なかったことにしてやるう。

「と、ところでだ。お前の方こそ何をしているんだ？ さっきの会話からするに、二人で一緒に食べるようなことを言っていたが、もしかして、その食材か？」

「そうなんだよ！」

今の今まで黙って俺たちの会話を聞いていたユツキーの片割れが、待ってましたと言わんばかりに大声で割り込んできた。彼女の表情は溢れんばかりの笑顔だ。

「今日ね、『今晚私の両親が居なくて、ご飯がないんだよー』なんて話をユツキーにしたら、なんとなんと、ユツキー家の夕飯に招待されちゃったんだよっ！」

「招待しちゃいました！」

「ユツキーのご両親も居るし、迷惑かけるからって最初は遠慮してただけど、僕が作るから心配しないで、なーんて言われたら行かないわけにはいかんぜよ！」

「いかんぜよ！」

この女、<sup>スマ</sup>幸せの絶頂のような顔しやがって。なんか腹立つ。その横で言音の言うことを半端に復唱するユツキーもなんか腹立つ。

「ちようど僕も、言音のことを両親に紹介しておこうと思ってたところだし、この際それも済ませておくよ」

「え、ええ！？ そんなこと聞いてないよ！」

ユツキーが平然と言った言葉に、過剰に反応して驚く相棒。

「うん、言っていないから」

「ひ、酷いよユツキー！ そんなこと知っていたら、もうちょっと綺麗な格好して行くのに！ 今から着替えに帰る時間なんてないよ！？」

この女の言うことは、まあ、正論なんだろうが、……そのことを知っていようとまいと、ユツキーの両親に会うことは変わらない

だろつに。この娘はちよつとアホなんじゃなかるつか。

「もうちよつと綺麗な格好？ 何を言ってるんだい、言音」

「え？」

「君はもう、十分すぎるほどに綺麗じゃないか」

「……………へ？」

かああ、と水銀の体温計のように赤くなっていく彼女。

「も、もうユツキー！！ 友達の居るところでそんな恥ずかしいこと言わないでよ！」

「あれ？ 嫌だった？」

「……………いい、嫌じゃないけど……………」

口を尖らせながら、両手の人差し指をつき合わせてモジモジ。

「つ、続きは二人だけの夜の時に言ってほしいかなあ、……………なーんて……………」

「言音……………」

「ユツキー……………」

見つめあう二人。言葉の語尾が小さくなって行って、同時に二人の距離も短くなっていく。そして二人は、この人々が往来する店の  
中で

……………。

……………。

「なあ奈々」

「ど、どうしたの、おにい？ そんなに怖い顔して……………」

「俺は今久々に、血が吹き出るまで人を殴りつけたと思った」

「ええ！？ ダメだよそんな母さんみたいなことしちゃ！」

「心配するな、男のほうだけだ」

「そういう問題じゃなくて！」

「女のほうは、そうだな……………あのやかましい口を俺のモノでふさいで……………」

「だからダメだってーっ！！」

くそ、なんたる屈辱か！ 二人のアツアツぶりを見せ付けるとは

俺に対する侮辱か！？ 彼女のいない俺に対する当て付けかあああ  
！！

「くそ、帰るぞ、奈々！」

「えー？ まだ買い物終わってないよ！」

「じゃあ早くしてくれ！ このままじゃ俺の理性が崩壊する！ あ  
と数分でこの二人を肉片に分解してしまえ！ なんだあああ！！」

「肉片！？ わ、わかったよ！ なるべく早く行ってくるから、何  
もしちゃだめだよ！！」

「ああなたにもしない……。もう先に出て、店の前で待ってるぞ……」

ふしゆるー、と凶暴な肉食動物のようなうめき声を出す俺を心配  
そうに見ながら、奈々は凄えスピードで商品をカゴに入れていく。

後は頼んだぞ、と呟いて、俺は店の出口に向かう。

途中で呼び止めるような男ゆうじんの声が聞こえるが、完全に無視。今立  
ち止まったら本当に殴りかかりかねない。

……勢いでユツキーと別れてしまった俺が、宿題のことを言うの  
を忘れていたのに気付くのは、家に帰って数分後だった。

「もー、いい加減に機嫌なおしなよう」

「何を言っている我が妹よ。俺は別に不機嫌ではない。ただちよっ  
と、虫の居所が悪いだけだ」

「全く一緒のことだよ……」

夕食を終えた後、俺たち二人はリビングのソファに座り、テレ  
ビを見ながらなんとはなしに会話をしていた。

がはは、とバラエティー番組の出演者のタレントが下品に笑って  
いる。しかしそれとは対照的に、俺の機嫌は相変わらず低空飛行を  
続けていた。

「何がおにいの癪に障ったの？ 宿題のこと？」

「……別に」

「まあ、それはおにいがちゃんとやらなかったのが悪いから仕方ないでしょ」

ぐ、と心に刺さるような一言。しかし、俺はそれが原因で不機嫌なわけではない。

「それは今からユツキーの家に、宿題を借りに行けばいいことだろう。即解決だ」

「え、ええ！？ それはダメだよー！！」

「は？ なんで？」

なんでそんなに慌てている？ 買い物するとき、宿題をやっていないなら借りに行けばいい、とかなんとか言っていたのはコイツじゃあなかったか？

「えええと、そ、それはあ……」

「それは？」

赤くなりながら、もごもごと答えを濁そうとする奈々。

ははあ。そういうことか。コイツも年頃になりやがって。

「そうだよなあ、こんな時間に男女二人が一つ屋根の下に居て、やることといたら一つしかないよなあ？ 確かに、そんなコトをシテいる中に俺が入って行ったら邪魔だよなあ？」

「はえ！？ あ、いや、奈々はそんなこと思っていないけど……」

「ん？ 奈々、何、『そんなこと』って？ お前はどんなことを思っていないんだって？ ちなみに俺は、二人で一緒に『夕食を作っている、もしくは食べている』中に邪魔しちゃ悪いと思ったんだが」

「え、あ、いや……」

「どうした？ 早く言ってみるよ」

「う、ううう……」

追い詰めれば追い詰めるほど、奈々の顔がだんだんとタコのように赤くなっていく。

面白い、そして可愛い。

もっとこいつの可愛さを引き出すために追求してもいいが、これ

以上やるとすぐに鉄拳が飛んできそうである。この辺の加減が難しいのだ。

しかし、コイツのおかげで少しは和んだ。機嫌も若干ながら良くなってきたかもしれない。

やっぱりもう一度奈々への言葉攻めを開始しようかと思っていたとき、玄関のドアの開く音が響いた。おそらく母さんたちだろう。

「ただいまー」

「ただいま」

奈々はその二つの声を聞いて助かったと思ったのか、早足で二人を迎えに行く。

玄関先から聞こえる声は、心なしか弾んでいる。十分に休暇を楽しんできたようだった。

……本当に兄弟ができたらどうしよう。十七歳差なんてのは勘弁して欲しい。

「あら、奈々ちゃん、夕食はハンバーグだったの？ まだいい匂いが残ってるわ」

「本当だ。父さんも食べたかったよ」

リビングに入ってきたあと俺にただいまを言って、荷物をテーブルに載せながら父さんと母さんが言った。

「でしょでしょ？ 奈々頑張ったもんねっ！ おにいにおいしいって言われたんだ！」

「それはよかつたわねえ。なでなでしてもらった？」

うん！ なんて返事をしながら、奈々は自分の作った料理を嬉々として事細やかに母さんに説明していく。

父さんは俺の横に座った。

「何か変わったことはなかったかい？」

「ああ、何も無い。強いて言えば、台所にゴキブリが出て奈々がぎゃあぎゃあわめいたことくらいか」

それじゃあ大丈夫だね。そう言って父さんは、ニュースが始まったテレビに目を向けた。

「父さんは？ 何か変わったことはなかった？」

今度は俺が問う。

「僕？ 僕は何もなかったよ。強いて言えば、母さんが特上に可愛かったことくらいかな。おかげで、夜に三回もご馳走になっちゃった」

母さんが可愛いことと三回のご馳走の関連性が見当たらなかったが、深く考えると軽く憂鬱になりそうだったので軽くスルー。

世の中を生きていくためには、物事に関わり過ぎないようにしなければならぬのだ。

テレビもそこそこに夕飯の片づけをし、風呂に入って部屋に戻る。なんとなくベッドに倒れこみたくなる衝動を抑えきれず、そのままうつ伏せに倒れた。

夕方の出来事を考える。

ユッキーとその相棒の彼女は、とても幸せそうだった。俺たちと話している間中ずっと笑顔でいた。その幸せそうな二人を見ると、なんとなく、自分も幸せになっていくような気がした。ユッキーやその彼女と話すたびに、なにか漠然とした、淡い柔らかな感情が自分に湧いてくるのが分かった。

しかし、それを良く思わない自分が居る。

何故か。

理由は明白かつ単純なことなのだが、それを認められるほど俺の心は出来ていないし、広くもない。

それがただの嫉妬だなんて、

それがただの羨望だなんて、

知りたくもないし考えたくもない。

「俺も、まだまだ、子供、だ、な」

そう呟きながら、俺はまどろみの中に墮ちていった。

## エピソード ある日の君。(後書き)

前書きでも言った通り、今回は視点が違いましたね。今までの書き方とも全く違いました。

彼、どうでした？

実は彼は僕の別作品の主人公なのですが……ちゃんとかけてました？

さて、これで本当に最終話です。こんな駄作を見てくださった方、本当にありがとうございます！

今年はもう受験に専念するのでここに来ることはないでしょうが、四月になったら、きっと、大学生になって戻って来ます！  
また会う日までっ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0001c/>

---

何だかんだでキミのことが、

2010年10月8日14時13分発行